

## 高木兼寛のなかの少年藤四郎

今年(1991)、高木兼寛の故郷、宮崎県高岡町<sup>むかき</sup>穆佐をはじめ訪ねてみた。筆者は今まで、高木の言動にいつもつきまとう“少年のような純真さ”に親しみと憧れを感じてきた者であるが、この旅行によって、この“少年のような純真さ”が実は彼の故郷の素朴な風土に由来していることを知った。そしてこの“純真さ”こそ、高木兼寛の一生を支えとおした基本的気性ではなかったのかと思えてきた（彼には生涯、“打算”とか“駆け引き”とかいった言葉からはまったく無縁であった）。

### 1. 高木兼寛の生い立ち

高木は幼名を藤四郎といった。嘉永2年(1849)の生まれである。家は代々薩摩藩士であったが、武士といってもごく下級の武士で、平生は大工で生計を立てていた。薩摩藩では元来、武士たるものは卑怯なふるまいをせず、あくまでも勇敢であれば、もう学問などはほどほどでよいとされていたが、藤四郎の両親はこの薩摩の風習とは違って教育にはきわめて熱心であった。

藤四郎は勉強することは人一倍好きであった。7歳のとき中村敬助の塾にはいり、漢学を学んだ。先生に褒められると、それが嬉しくて、いくらでも勉強をした。朝、学友がやっと眠りから覚めるころ、藤四郎は塾へ行く道を大声で、昨日習ったばかりのところを一言半句間違わず暗唱して通ったという。それは、俺はもう勉強してしまったぞ—という何か学友に示す可愛い示威行為のようにさえみえた。朝だけの勉強ではものたりず、さらに夕方の塾生にも加わった。夕方の塾生はすべて年長者であったが、この勉強好きの少

年をみんなが可愛いがった。

しかし勉強好きとはいっても近くの悪童と遊ぶことは一層好きで、いくら時間があっても足りないという日常であった。こんな話が残っている。中村塾に通っているある日、村社の祭りがあり、境内でいろいろな面白いことがあって、塾へ行くどころではなくなってしまった。そこで彼は、このことを内緒にして、父親には塾に行っていたことにして頬被



穆佐の八幡神社

少年時代この境内でよく遊んだ。今はほとんど人けがない。

りしていた。ところが悪いことに塾の先生がそのことを、すっかり父親に告げてしまったため、父親からきつい折檻をうけた。その折檻の傷跡は黒い斑点として生涯のこった。彼はその斑点をみるたびに、父親をだましたことを恥じ、また悪童だった子供のころを懐かしんだという。

12歳になったとき、藤四郎は中村先生に将来医者になりたい旨を打ち明けた。多くの村人から尊敬されていた穆佐村の黒木了輔という医師に憧れていたのである。家の職業を継ぐことが当時の常識であったから、藤四郎にとってはかなり勇気のいることであった。中村敬助は、かねがねこの頭の良い少年を、この小さい村で大工として朽ち終わらせるのは可哀相だと思っていた。彼はさっそく地頭の毛利強兵衛に相談に行った。毛利も前々からこの利発な藤四郎を何とか中央にだしてやりたいと思っていたので、二人の意見は完全に一致した。二人は父親を説得しにいった。父親としては、大工の跡を継いで欲しかったのであろうが、二人の熱意に屈服せざるをえなかった。

いろいろの事情で医学の就学はおくれたが、17歳の時ようやく鹿児島に遊学することになった。地頭の毛利は鹿児島の自宅を藤四郎の下宿に提供した。

鹿児島の医学校では、石神良策と英医ウィリスに師事した。石神はまもなく維新後の海軍の衛生部を創設するため上京した。このことから高木は英国医学を生涯学ぶことになり、また身を海軍に置くことになったのである。運



石神良策

高木兼寛の医学の師匠であり、また彼を海軍に導いた大恩人。



英医・アンダーソン

明治6年、海軍軍医学校教官として来日、高木兼寛を母校セント・トーマス病院医学校に紹介した。

命とは面白いものである。

石神の指示にしたがって、高木は上京し、海軍医務局に勤務した。そしてこれまた石神の仲人で洋学者・瀬脇寿人の長女・富子と結婚した(明治5年、1872)。石神は、高木がなるべく早く英国に留学することを期待していた。高木は海軍軍医学校教官・英医アンダーソンに師事することになった。ここでも高木の学才と熱心さはアンダーソンの賞賛的になった。アンダーソンは高木の非凡な才能ばかりでなく、彼の裏表のない男らしくあっさりした性格を好んだ。他の日本人と違って無用の秘密主義をとらず、決まれば断固実行するといったところが好ましかった。ただアンダーソンには、高木の薩摩隼人的な粗暴さが気にならないでもなかった。つぎのような逸話が残っている。

ある日高木は芝の飲み屋で友達とずいぶん飲んだあげく、アンダーソンの家を訪ねた。アンダーソンは気のすまないまま高木を家にあげたが、彼はその家のウイスキーの瓶をとりあげ、がぶ飲みをして、何とも言えない醜態を演じたいらしい。はっきりした記憶がないまま翌朝アンダーソンを訪ねたところ、アンダーソンは色をなして怒鳴りつけた。「西欧の紳士は礼儀を貴ぶことを本領としている。君が昨夜やったことは、断じて良識ある紳士のやる行為とは思えない。あのような行為は、英国では馬丁走卒でさえ決してしないことだ。

今後、君が酒気を帯びて、わが家にきたら、一步も家に入れないから、そのつもりでおれ」。高木は土下座せんばかりに、恐縮し、その非礼を詫びた。彼はこのような粗暴な行為はこんご絶対にしないことをアンダーソンに固く誓った。

アンダーソンもさすがに繊細な英国紳士であった。高木のこの態度のなかに田舎育ちの少年のような純朴さをみとめ彼を許した。そして、今まで抱いていた一抹の不安を払拭し、高木を彼の母校であるセント・トーマス病院医学校に留学させるべく紹介、推薦した。

## 2. 脚気の撲滅に大成功

高木は5年の留学を終えて明治13年11月に帰国した。セント・トーマス病院医学校での成績は抜群であった。帰国するとただちに積極的な活動を始めた。一つは留学前からの念願であった脚気の予防・治療の研究であった。

脚気という病気は、今ではあまり知る人が少なくなったが、症状としては、まず全身がだるくなり、そのうち手足の運動麻痺や浮腫が始まり、運動をするとはげしく動悸して、しだいに寝たきりの状態になっていく、あるいは脚気衝心といって胸部から腹部にかけて突然けいれんがおこり、激しい苦悶のうちに死んでいくといった恐ろしいものであった。学生や兵隊に多く、とくに海軍では兵員の約3割は脚気にかかっていると見てよいほどであった。

帰国してから1年数か月、高木はいろいろな資料を調査して、ようやく一つの結論に達した。それは、この病気は栄養のバランスが悪いために起こるのであり、蛋白質を多く摂れば必ず治るというものであった（脚気がビタミン欠乏症であることが分かった現在からみると、蛋白質を多く摂ればビタミンも多く摂ることになったのである）。高木としては、すぐにもでも兵隊の食事を改善して脚気をなくして見せたかったのであるが、兵食の改善といったことはそれほど容易にできることではなかった。その上当時は、この高木の栄養欠陥説だけでなく、東大と陸軍の研究者が出していた細菌による伝染病説があり、当時はむしろこちらの方が羽振りをきかせていたのであった。



伊藤博文

高木兼寛の脚気の研究や有志共立東京病院の運営を積極的に支援した。

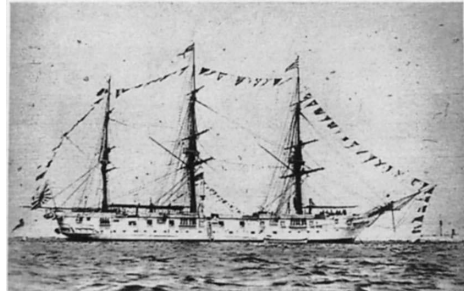
川村純義海軍大臣に再三、この兵食の改善を訴えたが、ちがちがあくようには思えなかった。自分には治療法がはっきり分かっているのにとすると気が焦るばかりであった。そこで彼は、川村大臣よりももっと大物を動かせないかと考えた。大物といえば、参議・伊藤博文、さらに大物といえば明治天皇である。幸か不幸か、天皇も脚気で苦しんでおられる様子であった。まず、高木は思い切って伊藤博文に面会し、事の次第をすべて打ち明けた。高木の熱心な説明に伊藤も次第に乗ってくる感じであった。ついに伊藤は「いったい君には本当に脚気を治す見込みがあるのか」と問うた。すかさず高木は「もちろん確信がございます」と

答えている。

伊藤は、この高木の兵食改善にかける熱気にあてられたらしく、「実は、陛下も脚気にはずいぶん参っておられる。自分が陛下に仲介の労をとるから、一つ陛下に君の思うところを、恐るところなく腹藏なく申し上げてみてはどうか」と言い始めた。高木の熱いうったえを聞いているうちに、伊藤の父性本能がくすぐられ、なんとかこの男の望みを叶えてやりたいと思うように変わってきたらしいのである。

数日後、伊藤からすぐに参内するように連絡があった。チャンス到来である。参内日は明治16年11月29日であった。当日、高木はその席で、今まで彼が研究してきた一切の経過をご説明し、兵食の改善について天皇のご英断をお待ちすると言上した。内容は優に30分以上はかかるボリュームのものであった。天皇の前で、30歳そこそこの高木が、よくも堂々と長時間言上できたものと驚くのである。当時、天皇に直接言上するなどということは、大変なことで、緊張してほとんど言葉にならなかったといわれている。陸軍大臣

の山県有朋などにしても、恐懼して天皇の前では何一つ語れなかったと伝えられている。高木の場合には、やはりどうしても天皇に聞いていただくしかないという開き直りと、伊藤からの“思うところを恐るるところなく腹藏なく申し上げるがよかろう”という温かいアドバイスが、彼の素直な精神を落ち着かせたのであろう。



軍艦「筑波」

高木兼寛の改善食を積んで、栄養実験(脚気予防実験)のために長い航海に出発した。「筑波」からは「病者一人もなし、安心あれ」という電報が送られてきた。

天皇に奏上した効果は次々とあらわれてきた。軍艦「筑波」の350人近い兵士をつかって、改善した兵食の栄養実験(脚気予防実験)ができることになった。そして「筑波」は、高木の改善食を積んで、10か月もかかる長い航海に出発して行った。もしこの改善食に効果がなければ、160人近い脚気患者と20人以上の死者をだすことはほぼ間違いないことであった。この長い航海期間中、高木ははげしい不安と期待のために眠れない日が続いた。

不安と期待で待っていた高木に飛び込んできたのは「ビヤウシャーニンモナシアンシンアレ」(病者一人もなし安心あれ)というハワイからの電報であった。脚気患者は一人も出なかったのである。高木はこの電文を前にひざまずき、神に感謝した。こうして高木の脚気の栄養欠陥説は、その正しさが完全に実証されたのである。高木の改善食によって以後海軍から脚気患者がでることはなかった。

後年ある軍医が、高木に「もし筑波艦内に脚気患者が出たらどうするつもりだったのですか」と問うたところ、高木は「その時は切腹してお詫びするつもりだった」と即座に答えている。まさに決死の思いの実験だったのである。

### 3. 医学校、慈善病院の設立

高木が慈恵医大の前身、成医会講習所を創立したのは、彼が英国から帰国して間もない明治14年（1881）5月1日であった。留学先のセント・トーマス病院医学校では、この医学校の歴史が“まず病人があり、ついで病院ができ、そして医学校がつくられた”ということであったのを知って深く感動した。帰国したら、自分もこのような病院と医学校を是非つくってみたいと思った。

高木が帰国して最も強く感じたことは、日本は貧しく、一旦病気になったら医者にはかかれず、死ぬしかない病人が溢れていることであった。このような病人のために無料でかかれる病院、慈善（施療）病院を早急に作らねばならないと思った。彼はもともと、貧しい病人から医療費をもらい、医を金儲けの手段にすることはどこか間違っていると思っていた。

当時、東京でも大きい私立病院がいくつか作られていたが、しかし貧しい庶民にとっては遠い存在であった。高木はある私立病院の開院式に呼ばれ、その祝賀会の席上で、こともあろうに「これでは、金儲けのための病院、つまりお金のある者だけが来る病院じゃないか」と云ってのけた。これには回りの者も驚くどころか、あっ気にとられたといわれている。要するに、高木の言いたかったのは、病院を作るならどうして慈善（施療）病院を作らないのかということであった。

高木の患者中心主義は徹底したものであった。晩年の話であるが、彼が患者から立会をたのまれると（普通の場合は主治医のメンツをたて、その場を繕うものであったらしいが）、彼の場合は少しも主治医を仮借せず、無遠慮に主治医の手落ちなども喋ってしまうので、主治医としては患者の前で赤面せざるをえないことがしばしばあったといわれる。だから高木と立会うのは、試験官の前に出るほど恐ろしかったとも云われている。高木にしてみれば、医者メンツをまもるよりも患者のいのちをまもる方が大事なわけで、べつに勿体ぶっていたわけではなかったのである。

高木が帰国して間もなく、福沢諭吉の高弟・松山棟庵が訪ねてきた。松山は京都で蘭学と医学を学び、慶応義塾で英語を学んだ英国派医師であった。高木と松山は、いろいろ話し合った結果、いま日本に広がっている冷たい医療を、もっと温かい人間味のあるものにすべきではないか、そのためには慈善病院とその医師を養成する医学校をつくるべきではないか、という結論に達した。彼らはまず、この二つの事業を推進するための医学団体「成医会」を結成した。

実は、福沢諭吉と松山棟庵は、ドイツ医学系の東大に対抗して、明治6年に慶応義塾医学所なる英語系の医学校をつくっていた。不幸にして、この医学校は経済的破綻のため約300名の卒業生を出しただけで、7

年間の寿命で廃校になってしまった。オランダ医学を引き継ぎ、さらに英語系の医学を勉強していった人たちは、この慶応義塾医学所の破綻によって強い敗北感を味わっていた。そのような状況に、高木が最新の英国医学を身につけて帰国してきたのである。高木、松山がつくった成医会に、彼ら英国派医師団が大きい期待をもって入会したのは当然であった（むしろ、この医師団が高木の帰国を待っていたといった方が事実に近いかも知れなかった）。

この医師団に加えて、海軍軍医学校でアンダーソンに鍛えられた若い軍医たちもこの会に加わったため、会員はまたたく間に100人近くになった。

成医会が最初の事業として設立した医学校、成医会講習所は、このような医師団、軍医団を控えていたため、教師に事欠くことはなかった。当時教師の獲得に苦労していた他の医学校からみれば夢のような話であった。

成医会のつぎの事業は慈善病院をつくることであった。高木らの熱心な啓蒙活動によって、多くの人々から好意ある寄付金が集められ、ようやく明治



松山棟庵

福沢諭吉の高弟。高木兼寛と一諸に成医会講習所（慈恵医大の前身）、有志共立東京病院（慈恵医大付属病院の前身）の設立に奔走した。



15年8月に設立された。病院名はその成立の由来から有志共立東京病院と命名された(これが慈恵医大付属病院の前身である)。この病院も医学校と同様、医師団、軍医団を控えていたため診療医に不足することはなかった。患者は急増していった。

#### 4. 日本最初の看護婦学校の創設

しかし、この有志共立東京病院は施療病院であったため患者が増えれば増えるほど経費がかさみ、運営が困難になった。今後運営費をどのようにして捻出するかが重大な課題になってきた。

この課題解決のために立ち上がったのが「婦人慈善会」であった。そのころ鹿鳴館を舞台に活躍していた伊藤博文夫人ら華族夫人は、以前から慈善病院のために懸命に奮闘している高木兼寛の姿勢に心から共鳴していた。彼女

らは、この病院の財政的援助をするための組織、「婦人慈善会」を結成した(明治17年5月)。この会が手始めに行った行事は、鹿鳴館での慈善バザーであった。



大山 巖夫人捨松

「鹿鳴館慈善バザー」を開催し、有志共立東京病院看護婦教育所(慈恵看護専門学校の前身)の設立費を捻出した。

婦人慈善会ができて間もなく、会員の一人、大山巖夫人捨松は、他の会員と一緒にこの有志共立東京病院を参観したことがあった。彼女は、米国の看護婦養成学校を出たばかりであったので、この病院に正規の看護婦が一人もいないことが大変不思議に思えた。早速、高木院長にそのことを尋ねると、「それは十分承知しておりますが、なにぶんにもお金がなくて、それどころではございません」という返事であった。病院の現状は、高木が理想とした全人的医療(病気を診ずして病人を診よ)からはかなり遠い状態にあった。慈善病院をスタートしてはみたもの

の、その運営費の捻出に困りはてている様子であった。この様子が捨松の母性本能をくすぐったのか、彼女は早速、米国で見聞した「バザー」を開いて、高木院長を助けようと思い立った。これが明治17年、3日間にわたって鹿鳴館を沸かせた、有名な「鹿鳴館慈善バザー」であった。

バザーでの出品は、婦人や令嬢らの手芸品3,000点であった。普段は会うこともない名流婦人や令嬢が販売サービスをするというので大評判となり、入場制限するほどの盛況になった。バザーは予想以上に好評だったので、翌年も同じように鹿鳴館で開かれた。このときは皇后、皇太后が参観され、有志共立東京病院に深い関心を示された。

この両度にわたるバザーでえられた収益金は、そっくり病院に寄付され、看護婦養成所の設立費にあてられた。これがわが国最初の看護学校、有志共立東京病院看護婦教育所であった（現在の慈恵看護専門学校の前身である）。

婦人慈善会は、病院にたいする財政的援助をさらに持続強化するため、参議・井上馨を先頭に、皇室に上奏書を提出した。これによって、病院は皇后を総裁に戴くことになり、また病院の運営はそのご下賜金によって支援されることになった（明治20年1月）。病院はこれを記念してその名を（皇后の命名による）東京慈恵医院とあらため、医学校も東京慈恵医院医学校と改称された。こうして、高木の素朴な熱意は多くの人々の善意に共鳴し、拡大していった。

## 5. 保健衛生の講演行脚

日露戦争勝利の翌明治39年（1906）、高木は久しぶりに欧米の旅に出かけた。主な目的は、米国コロンビア大学や母校セント・トーマス病院医学校で、脚気について講演することであった（特にセント・トーマスでは3日間連続の大講演であった）。この講演によって、後に高木はビタミン発見の先駆者としてきわめて高い評価をうけることになった。

高木もそのことを十分予想していたらしく、その講演原稿の作成にはきわめて慎重であった。彼は原稿作成のため、医学校の事務長（山川泉）と富子



セント・トーマス病院医学校  
で講演する高木兼寛 (1906)  
ここでの講演が彼を世界的栄養  
学者にする切っ掛けになった。

夫人とを同伴して、北海道に2週間も滞在した。毎日、彼は夫人を前にしてリハーサルの講演を行い、事務長はそれを速記するという生活が続いた。夫人は、聴衆の代表者として講演を聞き、分かり難いところや腑に落ちないところは遠慮なく質問した。高木は、その質問を素直に聞き入れ、その都度草稿を修正していった（そのためか、すでに英語の活字になっているその講演はいま読んでみても非常に分かりやすい）。事務長は講演の速記をしながら、この睦まじい情景を目にして本当に羨ましいと思った。彼は後年、「先生は奥様にたいしては絶対の信頼を置いておられ、まことに美しいご夫婦でした」と述懐している。

大正にはいってからは、高木は全国の小学校、中学校、女学校を中心にほとんど毎日のように保健・衛生の講演に出かけた。そしてその講演旅行のときにも、いつも夫人が同伴し、理解し難いところは聞き直し、高木はそれによって話し方を変えていたという。

ある女学校でのこんなユーモラスな講演風景がのこっている。「かっぶくによい高木先生は威風堂々として、先導の校長先生よりご立派でした。無帽主義のお話では『男は帽子などかぶるから頭の毛がなくなってしまうんだ』とご自身のはげ頭をたたいて皆を笑わせたりなさいました。……そして最後に、先生ご考案の舟こぎ体操を、先生とご一緒に生徒全員が声を張り上げて行いました。ご満足げに巨体をゆすってご退場になる先生の後ろ姿を、今でもよくおぼえております」と（この「満足げに巨体をゆすって退場していく兼寛の後ろ姿」に、先程の「習ったばかりの文章を得意げに大声で暗唱していく藤四郎少年の姿」を重ねてみってしまうのは筆者だけであろうか）。

大正8年(1919)は、高木にとって思いがけない厄年になってしまった。将来を期待していた次男、三男がほとんど同時に急死したのである。その頃か

ら彼は急に老いこみ、長男・喜寛（後の慈恵医学長）にいろいろ後事を託すようになった。

喜寛は父・兼寛のあとを継ぐのは荷が重すぎると思っていたので、ある時「一体、お父さんは色々仕事を残す様だけれど困りますね。私にはとてもやっていけないと思うのです。ですから継がないものと見ていて下さい」と云ったことがあった。すると兼寛は静かにこう云ったという、「決して継いでもらおうとは思っていない。何方でもよいから良い人を選んで、仕事をして貰えばよい。お前はただその人を手伝っていけばよいのだ」と。

高木はその頃、自分の一生を何度も振り返っていた。自分は今まで、精力的に働き、そして多くの仕事をしてきたと思っていた。しかし、それらはすべて自分のまわりの人々によってなされてきたものではなかったのか、自分はただそれを手伝っただけではなかったのか、と思いはじめていた。

少年のころ医者になりたいと思った時、中村先生や毛利地頭が父親を説得して、レールをしいて下さった。鹿児島では石神、ウィリス両先生に師事しているうちに、海軍にはいり、英国に留学するお膳立てができていた。アンダーソン先生には留学先の医学校を決めていただいた。英国から帰ってくると、今度は松山から多くの若い医師団が待っていてくれた。そして一緒に慈善病院や医学校をつくった。病院の運営では伊藤参議やその夫人らのお陰で、皇后のお世話にもなることになった。今、自分は脚気の研究で世界的になろうとしている。しかしこれとて多くの軍医たちの努力の成果ではなかったのか、伊藤参議や明治天皇のご好意の結果ではなかったのか。終始自分の影のように世話をしてくれた妻・富子の貢献も忘れてはなるまい。

彼は、今まで多くの人々によって生かされてきた自分の姿を思い浮かべていた。有り難いことだと思った。そしてもっと広大な宇宙の流れの中に流



高木兼寛夫人富子  
洋学者・瀬脇寿人の長女。常に兼寛の影となって彼を助けた賢夫人。

されている自分を見つめていた。

高木は、大正9年(1920)3月21日、持病の腎炎が再発し、4月12日、脳溢血症状を発し、翌13日午後2時、ついに意識を回復することなくこの世を去った。享年72歳であった。